



教わる側、教える側

想像以上に厳しい状況に直面した SaaS 版 I.B.MUSEUM の開発構想。どんなに優秀な機能も救いにならないという学芸員の悲痛な声に対し、私は苦し紛れの質問を投げました。ならば、何があれば現状打破に役立つのですか？

想像以上に深刻さを増している、博物館の人手不足。これを解決しない限り、どんなに良いシステムを開発しても、館の現状を打破することなど不可能。

小規模ながら来場者の多い美術館なら、きっと SaaS の需要があるはず……と勇んで訪問した私は意気消沈。絶句したまま、次の質問に移行することができません。私は、仕方なくシステムのお話を諦めることにしました。

でも、このまま帰るのは癪です。懸命に運営しておられる館の状況を少しでも変えるために、何かお手伝いできることはないか。仕事抜きで、学芸員と雑談を続けました。

役立たずのシステム開発会社

収蔵品管理システムが館の役に立たないことは、不本意ながら理解。では、館が（人材以外に）欲しているものは、いったい何だろう？ 私は、率直に訊ねてみました。

学芸員は、即答してくれました。「仕事を学べる仕組みが欲しい。Web サービスとか、作れないですかね？」

インターネット上には、さまざまなビジネス情報サイトがあることはご存じの通り。中には、実務指南系のコンテンツを展開するものも少なくありません。しかし、学芸員の仕事は、あまりにも特殊。ビジネス市場として捉えにくいので、発信できそうなのは学術機関くらいでしょうか。

PC を活用できるとは言え、さすがに畑違い。何もお約束することができない自分の無力を呪いながら、館を後にするしかありません。同行した当社スタッフともども、駅のベンチに座り込み、ボンヤリと考え込んでしまいました。博物館業界よ、本当にこれでいいのか……と。

同じ県内でさえ情報が途絶える博物館業界

話を伺った小規模美術館の学芸員は、本当に困り果てておられる様子でした。相談しようにも、どこで、誰に、何を訊けばいいのかさえ分からない状況は、とても辛いことでしょう。とは言え、当社は何もできません。

強いて言えば、他館の学芸員を紹介することくらいでしょうか。親身になってくれそうな方の顔は何人も思い浮かびますが、どの館も多忙であることには変わりありません。広い意味での後輩とは言え、相手は見ず知らずの学芸員。時間を割けるとしても、限界があるはずで。

答が見つからないまま、数日後。たまたま、同県内の別の博物館に伺う機会がありました。今回は県立クラスの館ということで、県下の他館が苦しみ実情を何気なくお話ししたところ、その方はひどく立腹されました。

「そんなに気の毒な状況を放置していたとは。運営に苦しむ館があることは聞いていたが、そこまでとは思わなかった。彼らをサポートできる場が必要だ」

このお言葉を聞いた時、「教える側と教わる側」が一本につながりました。互いに多忙とは言え、同県内であれば状況を把握しやすいし、連絡も取りやすいはず。この2館は、ご紹介すれば良い関係を築けるかも知れない……。



ここまで考えて、はたと気づきました。別に互いが顔見知りである必要はないのでは？ 教える側は好意で協力してくださる。教わる側も、先の1館だけではなく、同じような課題を抱える館は全国に存在するはず。とすると、その情報は、全国の学芸員たちが欲しがらるのでは……？